

シネマ通信

第16号(2025年2月16日)



ステラ ヒトラーにユダヤ人同胞を売った女

第16回鑑賞作品

監督:キリアン・リートホーフ

出演:ステラ/パウラ・ベア「水を抱く女」、ステラの母/カッチャ・リーマン、ステラの父/ルーカス・ミコ、ロルフ/ヤニス・ニーヴェナー

1940年8月ベルリン。18歳のユダヤ人女性ステラは、アメリカでジャズシンガーとして成功することを夢見て、はつらつとした日々を送っていた。しかし、戦争が激化しユダヤ人への弾圧が強まる中、その夢ははかなく消えてゆくのだった。

3年後には、母親と共に軍需工場で強制労働につく身となったステラ。工場で始まったユダヤ人の一斉検挙からは免れたが、家族とともに身を隠して生活することとなる。そんな中で、ユダヤ人向けに偽造パスポートをつくるロルフと出会い、ふたりは恋に落ちる。ステラはロルフの手伝いをしながら、再び街を自由に歩き回っていたが、ある日、ゲシュタポに逮捕されてしまう。死を逃れるためにステラに残された唯一の道は、ユダヤ人同胞を裏切ることであった…

(史実に基づく架空の作品)

被害者か加害者か
ジャズシンガーを夢見た
若き女性は
何故密告者になったのか



About Them

「ステラ ヒトラーにユダヤ人同胞を売った女」でまず注目したいのは、主演のパウラ・ベア。1995年2月生まれの、現代ドイツ映画を代表する“美人女優”。差別表現かも知れませんが、敢えてこう呼びたい！気品と美貌と確かな演技力を備えた俳優です。

10代の時「The Poll Diaries」でデビュー。ドイツ映画界期待の新人として注目されますが、その名を世界に知らしめたのはフランスの名匠：フランソワ・オゾン監督の「婚約者の友人」。婚約者を戦争で失ったヒロインを叙情豊かに演じ、ベネチア国際映画祭で、マルチェロ・マストロヤンニ賞を受賞。続いて「水を抱く女」では、ベルリン国際映画祭最優秀女優賞を受賞しました。本作では、初ともいえる汚れ役。また、新しい魅力を見せてくれることでしょう。

監督は「ぼくは君たちを憎まないことにした」で日本でも知られるキリアン・リートホーフ。ハンブルク大学で映画を学んだ正統派の監督が、時代に翻弄された一女性の生涯を、寄り添うように描きました。



About Something

生あるものの宿命、死とどう向き合うかは、人類永遠のテーマ。古今東西、絵画でも文学でも音楽でも、数々の名作の原動力となってきました。「オール・アバウト・マイ・マザー」「トーク・トゥー・ハー」などで知られるスペインの巨匠：ペドロ・アルモドバルが、この命題に真っ向勝負を挑んだのが、最新作「ザ・ルーム・ネクスト・ドア」。公開を待つようにして、映画好きの友人と見に行きました。

久しぶりにニューヨークに戻りサイン会を開いた作家のイングリッド(ジュリアン・ムーア)は、旧友から、同じく旧友のマーサ(ティルダ・スウィントン)が重い病を患っているから会いに行つてと言われる。再会したイングリッドとマーサは、長年の空白など無かったように心地良い友情に包まれる。しかしそんな中、イングリッドはマーサから「がんで余命はわずか。治療を拒み尊厳死を決意したが、人の気配を感じながら最期を迎えたい。そのときのために、私のそば(THE ROOM NEXT DOOR)に居て欲しい」と懇願される。夢想だにできなかった友の頼みに激しく動揺するイングリッドだが、悩んだ末にマーサの願いを聞き入れる。そして、マーサが選びに選んで借りた森の中の瀟洒な家で、二人の共同生活が始まる。

限られていることを知っているから、流れる濃密な時間。二人のひと言ひと言が、互いの心に染みこむ。一瞬一瞬を慈しむような二人の生活シーンが、本作の主な舞台。通常、アルモドバルの映画は、色彩も、登場人物のパーソナリティも、ストーリー展開も賑やかですが、本作では窓外の木々の微かな揺らぎ以外は、ただ静か。食事をしたり買い物をしたり、ごく普通の日常が繰り返される中で、最期のドラマが刻々と迫ってくる。それにつれ二人のテンションは昂まり、観客もそれを共有する。SFXを駆使したホラーや、サスペンス映画では得られない、この上質なスリルが、本作のエンターテインメントかも知れません。

最後にもう一つ付け加えたいのが、エンディングの素晴らしさ。物語の展開、絵画的な美しさ、静謐な空気感。彼の映画人生の全てが凝縮された、珠玉の1~2分。遠い昔に見た「禁じられた遊び」のそれと同様、私の心にいつまでも残るラスト・シーンとなることでしょう。